

情報化に対応する表現指導の研究

- 「野生の思考」としての「放棄学習」への着目 -

埼玉大学大学院 母壁 浩一

未開人たちは、彼らの「野生の思考」を働かせ、徹底的な観察を行い、事物の間にあるもろもろの関係をあますところなく調べ上げようと努めていくなかで、ときには科学的にすぐれた洞察に到達することもあったと言われている（C・レヴィ＝ストロース『野生の思考』大橋保夫訳 みすず書房 1976年 14頁）。彼らの「神話的思考の本性」、すなわち「雑多な要素からなり、かつたくさんあるとはいってもやはり限度のある材料を用いて自分の考えを表現する（『同』22頁）」という特徴は、現代の教育の場における子どもたちの姿の中にも多く見ることができる。

一方、今までの情報化に対応する国語教育は、情報を客観的なものとしてとらえ、たくさんある情報からより適切な情報をいかに選別するかという問題設定で考えられることが多かった。しかし、情報を客観的なものとしてのみとらえ、それをどう操作すればよいかというような一元的な見方しかできていなかったために、その本性上主観的であり、また、必ず何らかの誤りを含む「野生の思考」のようなものは認めることができず、その結果として「放棄される学習」が出てくるといった問題点があった。

しかし、情報というものは、本来主観的な枠組みを前提としているものである。つまり、情報はフィクションとしての側面を必ずもち、すべてが客観的なものとしてはとらえられないものなのである。情報化に対応する国語教育、特に表現指導において、発表者が「野生の思考」としての「放棄学習」に着目する理由はそこにある。そこで、本発表では、現代の情報化社会における「野生の思考」としての「放棄学習」の意味について考察し、さらに「情報の主観的な側面を押さえ、情報をフィクションとしてとらえる授業」の構想について言及したい。

発表は以下の項目で行う。

- 1 情報化に対応する教育の現状
 - ①社会の情報化とその影響
 - ②先行研究ならびに実践例の検討
 - ③情報化に対応する教育の課題
- 2 情報化に対応する教育における「放棄学習」の問題
 - ①情報化教育における「野生の思考」への着目
 - ②「野生の思考」としての「放棄学習」の意味
- 3 情報化教育における「野生の思考」に着目した授業の構想